

ロスチャイルドの自然流ネリネづくり

岩本 陽児(和光大学現代人間学部¹)

Rothschild's Natural Method for the Breeding of the Exbury/Vico Nerines

IWAMOTO Yohji

Abstract

While I was given a one year sabbatical in 2009 Nickolas de Rothschild, the president of the Nerine and Amaryllid Society, kindly invited me for a viewing of his perhaps the world finest and largest nerine collection at his Exbury estate, Hamps, UK. The breeding of nerines at Exbury had started in the inter-war years by Lionel de Rothschild. Sir Peter Smithers who bought Exbury nerines in the 1970s contributed greatly, too, in breeding new cultivars in the following decades, then he 'returned' in 1996 his Veco nerines to Exbury. Nickolas de Rothschild and his head gardener Theo Herselman were kind enough to provide me with abundant hints and know hows in both cultivating and breeding nerines.

はじめに

南アフリカ原産のヒガンバナ科ネリネ属の球根植物は、ダイヤモンドリリーの別名が示すように、秋の日差しをきらきらと反射する、独特の花弁の光沢に特徴がある。原種が約20種あるといわれており、園芸化されてから400年近い歴史を持っている。

もっとも改良が進んでいる非耐寒性のサルニエンシス種には、朱色の基本種とその色変わりから生まれた園芸種が約700-800品種あまり作出されており、さまざまな色合いの単色およびストライプや、希少なピコディなどの複色花がある。英国で戸外栽培可能なボーデニー種にも、基本種の濃桃色および色変わりの白色のほか、品種名のつけられた改良種がある²。

私は2009年度に勤務先の和光大学から在外研究の機会を与えられ、ネリネ園芸の現状について調査の機会を得た。本稿では、2009年10月下旬の、全英ネリネ・アマリス類協会³会長、ニコラス・ド・ロスチャイルド氏の作場見学と聞き取りを中心に報告したい⁴。

前史

ネリネは、はじめ1635年にパリにもたらされ、人気となった。実は寄港地のケープ地方から出たものであったが、当時はこれを運んだ船の出航地で、オランダ商館のあった長崎⁵から来た植物との誤解があったようである。1655年には、英国海峡に浮かぶガンジー島に入ったものが半野生化した。これはオランダ東インド会社の船員が、海難のあと、救命のお礼に地元の治安判事ジョン・ド・ザウスマレスにプレゼントしたものが起源というロマンチックな伝説がある。この伝説は長らく信じられていたが、ガンジー島は砂丘であり、オランダ東インド会社の記録を調査したところ、この地での難破船の記録がないことが判明している⁶。

ユダヤ人銀行家の一族であるライオネル・ド・ロスチャイルド(当主ニコラス氏の祖父)が、英国南海岸のほぼ中央部、ポーツマスやサウサンプトンといった著名な港湾都市の西方にあたる、ニューフォレストの一角にある海辺のエクスブリー村に移住したのは第一次大戦前後にさかのぼる。カントリーハウス周辺にはパークおよび季節の花の咲き乱れる庭園が整備され、今やエクスブリーといえば、小型蒸気機関車が苑内



写真1、エクスブリーガーデン主要部分

中心部分が、樹木園となっている苑地。右上は一般の来園者むけ駐車場。右下に見えるのがネリネなどのガラス温室である。見づらいが、GoogleのGの位置にカントリーハウスがある。左下の水面は、北から南に流れるピーリュウ川。河口に近く、干潟が発達している。

を走る家族連れの行楽地として有名である⁷。海から吹き寄せる湿った南風のため冬も温暖で、苑内の植栽の小枝には、地衣類が見事に発達している。シャクナゲ類の生育がよく、エクスブリーつつじ(アザレア)をご記憶の方も多いただろう⁸。

エクスブリーにおけるロスチャイルドのネリネ栽培は、ライオネルによって1920～30年代に始められたものである。その後、1970年代に入り、コレクションはいったん売却された。⁹

エクスブリーの、一般入口よりも道をさらに左奥に行ったところにエステイト・オフィスがあり、ニコラス・ド・ロスチャイルド氏およびヘッドガーデナー、セオ・ハーセルマン氏の机がある。その先にネリネを中心とした球根¹⁰およびクリビアなどの宿根草温室(非公開)があって、高いところに「五本の矢」のロスチャイルド家の紋章が取り付けられている。5名のスタッフが作業中のこの温室は、相当な広さである。面積をニコラス氏に尋ねたところ、「さあ、知らないなあ」という鷹揚な返事が返ってきた。ネリネの株数も、これまた多すぎて不詳である。(写真1参照)

鉢物はすべて、腰くらいの高さの、畳一枚よりふたまわりほど大きい棚の上には並べられているが、この棚は可動式である。つまり、通行の際に棚を押すと鉄管がころの役割をして棚が動く。このため、通路面積は意外に少なく、広い温室がさらに有効利用されている。なお、棚の上面には不織布を置いて、湿度を保っている。理由は後記する。(写真



写真2、ニコラス・ド・ロスチャイルド氏。赤いポピーの飾りは、大戦の戦死者追悼の徽章。



写真3、早咲きのネリネはもう、種子を実らせていた。

2,3参照)

ネリネは、この棚の上に色別に配列されている。一見して、朱色系の分量が多い。早生は弁の幅が広く、晩生ほど狭弁になる。ここでは実生から開花まで5,6年かかるという。ネリネは流通量が少なく、ここでも一品種あたり、10球から15球ほどしかない。繁殖は自然分球のみ。鱗片繁殖等を導入しないのは、愛好家人口が少ないからである。ラベルには「5229」等、4桁の数字が記入してある。(写真4参照)



写真4、ラベルには4桁の育種番号が振られ、早くも命名済みの株もある

ところで、ネリネ改良の歴史を語る上で欠かせない人物が、故ピーター・スマミザーズ卿(1913-2006)であろう¹¹⁾。かつて第二次大戦時には、後に作家に転じるイアン・フレミングの部下のスパイ。「007シリーズ」の作中登場人物、複数名のモデルとみなされている軍人、政治家、そしてアマチュア園芸家であったピーター卿は、1972年にここエクスブリーのネリネ・コレクションを大量に引き取り、その後EU事務総長としてストラズブルグに滞在していた期間を除き、移住先のスイスで品種改良を楽しんだ。彼の改良種は、ルガルノ湖を見下ろす住まいのあったヴィコ・モルコートにちなみヴィコ系と呼ばれている。

1995年にニコラス氏と面会したピーター卿は、翌1996年に、自分が改良したヴィコ系ネリネをそっくりエクスブリーに「お返し」した。従い、いまエクスブリーで見ることのできるネリネは、スマミザーズのヴィコ系改良ネリネと、その末裔である。

ピーター卿はネリネのためにデータベースをつくり、ラベルも複雑で



写真5、遅咲きのストライプ花。

あった。私が見せてもらったピーター卿のラベルには「234264」とある裏に「30146」の数字。これに対してニコラス氏は、ピーター卿の鑑識眼には一目置くいっぽうで、この複雑きわまる番号システムには意味がないとして、上記のような大幅な簡素化を図っている。また、ピーター卿はきびしく選別を進めたが、ニコラス氏はどれも捨てない主義である¹²。品種改良のための人工授粉すら行っておらず、父親不詳で結実した種子を採集してラベリング、播種してはよい花を咲かせている。

エクスブリーにおけるネリネ栽培

従来、砂質培養土がよいとされていたが、土質を選ばないことが近年分かってきた。ここではジョン・イネスの三番培養土John Innes No.3をベースにしている。これを5に、荒砂1と発酵ヤシガラチップ(bulb fibre)を1、混合して使用している。植え替えは3~4年に一度がベストで、6・7月が植え替え時。植え替えないものは上土を替えてやるとよい。鉢いっぱいになったものは随時、分球・植えなおしている。とはいえ、数名のガーデナーをもってしてもこれだけの鉢には手が回りかねるようで、鉢からこぼれんばかりにみしり分球して機嫌よく開花しているネリネも多々、見受けられた。

興味深いことに、ニコラス氏によれば、ネリネ栽培で重要なのが鉢えらびという。ネリネは素焼きや陶器の鉢を好まない。というのは、根が巻いてしまうからで、プラスチック製がいちばん¹³。また、鉢底を乾燥させないように、濡らしたくずわた不織布を敷いてある棚で、ネリネは生育が良好である。5,6年かかる初花までの期間は、肥培管理により2年短縮することが可能。といっても、窒素を含まない粉末肥料を、花後から4月までの生育期間中に二、三回撒いてやる程度である。



原産地では7月末に大雨が降ることから、休眠期の途中に一度、十分に灌水

写真6、最新の、紫系大輪花だ。品種名は未定

を行ったところ、よい結果が得られた。4月から9月にかけては、50パーセントの遮光をしている。08年は2週間遅かったが、09年は2週間早めるなど、天候と相談して加減している。

生育期間である冬季の気温は4度～14度を維持している。日差しと風通しが重要なため、遮光はしない。霜に当たると球根が腐敗する。



写真7、甘やかな香りを放っていた

花色について

アガパンサス同様、黄色系は作出されていないが、その他はほぼ各色にわたる。最も新しい色は紫系。つぼみの段階では、黒や濃紫のものまである。(写真5～9)

ここエキスプリーでは、命名の際には、ピンクは少女、赤が男性、暗赤色だと悪い男のイメージでネーミングしている。白は、白熊やスノーキーンなど。ニコラス氏の個人的な好みは、渋いダークカラーという。白弁で底が緑を帯びる花(グリーン・スロート)はまだ作出されていないが、糸覆輪で底白の「ピコディ・プリンセス」は高価に取引されている。



写真8、朱金色の輝きが印象的な良花。

ネリネの香り

一般に無香だが、展覧会のために開花中の鉢を車で運んでいるとき等、時としてチョコレートの香りに包まれるこ



写真9、金茶色にブルーのストライプの配色は、ネリネならではの。

とがあると聞かされた。私は半信半疑だったのだが、この日、白に淡いピンクを掃いた花が、チョコレートコスモスに近い粉っぽい甘やかな香りを放っていた。これには、本当に驚いた。(写真7)

おわりに

私がネリネを初めて知ったのは、今から30年前のことであった。その後、何度か球根を購入して育てているが、手のかからないよいものだと思っている。今回、世界のネリネ園芸の総本山といえるニコラス・ド・ロスチャイルド氏のお棚を拝見して、最先端の未登録品種群に接し、また、多湿気味の栽培管理法を教わる等、得るところが多かった。この日、ロスチャイルド温室には、ワイト島の有力ブリーダーである、ケン・ホールKen Hall氏の姿もあり、趣味家の緊密な交流が窺われた。

英国で開発された用土や栽培法が日本の風土で直ちに適用できるかどうかは、今後検討しなくてはならないが、選択肢の一つとして参考に使っていたのであれば幸いである。

ところで、今回の見学に同行した植物学者ジェイムズ・リチャードソン氏が翌日、不審がって、とても本人には聞けなかったのだけれど、面白い質問を私にぶつけてきた。

「ロスチャイルドは、ネリネ改良で儲かっているのでしょうか？」。

私の考えでは、否である。どうみても、好きな趣味の世界に巨額のポケットマネーを投じているようにしか見えない。とほうもない趣味である。

かつて『ガーデンライフ』誌に掲載された平尾秀一氏の魅力的な記事が、私のネリネへの原体験となった。小稿が、日本のネリネ愛好家を増やしてくれたらうれしい。

なおエキスブリーでは、休眠期に限り、ネリネ球根を販売していることがある。詳しくは下記URLをご覧ください。私、岩本宛にご連絡をいただきたい。

<http://www.nerines.com/index.html>

Acknowledgement,

The author should like to thank Nicholas de Rothschild of Exbury for kind invitation to his world finest nerines greenhouse and Mr. Theo Herselman, the head gardener, for practical information on cultivating nerines. Richardson family, Dr Ian, Dr Françoise, James and Marino kindly assisted me throughout my stay in their accommodation.

文献

Barrie Ward, *Nerine- Information Sources, Reprint No. 3, from Amaryllids 03 Part 1*, The Nerine and Amaryllid Society, nd.

Reprint/Occasional Paper No. 4, *A list of Nerine Cultivars and Colours, compiled by an Old-fashioned Gardener*, The Nerine and Amaryllid Society, nd.

Andrew Eames, *Growing Nerine sarniensis A brief cultivation guide No. 2*, Nerine and Amaryllid Society, 2nd edition 2009.

[注]

- 1 Yohji IWAMOTO, Faculty of Human Sciences, Wako University, Tokyo.
iwamoto@wako.ac.jp
- 2 サルニエンシスとボーデニー、サルニエンシスとアンジュラータの種間雑種もある。
- 3 RHSの傘下団体として、1997年に結成された。会誌を年三回発行し、アマリリス科植物園芸の振興を図っているほか、ネリネ園芸種に関しては登録事業を国際的に行っている。「モルヴァーン秋のショー」に毎年出展しており、私が今回、ロスチャイルド温室を見学したきっかけも、モルヴァーンショーであった。なお、URLは2010年4月15日に取得した(以下同じ)。
<http://www.nerineandamaryllidsociety.co.uk/>
- 4 日本でネリネが知られるようになったのは、故平尾秀一氏の功績が大きい。1980年代に誠文堂新光社の雑誌『ガーデンライフ』誌が、カラー写真入りで紹介していたことを記憶する。

- 5 これが平戸であったか、出島であったか。今後の研究が待たれる。
- 6 ネリネ改良その後の、委細については、下記URLをご覧いただきたい。
http://www.nerines.com/History_2.html
- 7 <http://www.exbury.co.uk/website/estate.aspx>
- 8 改良つつじとして一時代を画したエクスブリーアザレアは、その強健さゆえに一度植えると買い直す人がなく、結局売れなくなってしまって、近年苗木生産を中止している。
- 9 <http://www.nerines.com/History.html>
- 10 ラケナリア *Lachenalia* もまた、ニコラス氏ご自慢のコレクションなのだが、委細は別の機会に譲りたい。90原種のほか、150品種がコレクションされている。
- 11 ピーター卿の経歴については、新聞各紙の追悼記事の中で、2006年6月15日付タイムズ紙が詳しい。
<http://www.timesonline.co.uk/tol/comment/obituaries/article1083586.ece>
2006年6月25日付のニューヨーク・タイムズ紙も、ピーター卿のアマチュア園芸家としての側面に言及している。
http://www.nytimes.com/2006/06/25/world/europe/25smithers.html?_r=1
- 12 ただ、ニコラス氏がいま扱っているのは、かつて厳密な選別を経た名品とその子孫ばかりであるから、そのあたりは割り引いて考えてよさそうである。
- 13 シンビジューム属のいわゆる東洋ランも、従来と異なり、根を長く伸ばさないように育てるのがむしろ上作と聞くが、似通っていて興味深い。